

第二十一組 第二回「推進員の集い」講話録

二〇一五年十二月十日 難波別院堺支院にて

生きるとは・・・

阿弥陀さまからの提案

お話 沖野 頼信 先生

第七組 本照寺 前住職



さんきえもん 三歸依文

人身にんじん受け難がたし、いますでに受く。仏法ぶつぽう聞き難がたし、いますでに聞く。
この身み今生こんじょうにおいて度どせずんば、さらにいづれの生しょうにおいてかこの
身を度だいせん。大衆だいしゅうもろともに、至心ししんに三宝さんぼうに歸依きえし奉たてまつるるべし。

自らぶつ仏に歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゅじょうとともに、
大道だいどうを体解たいげして、無上むじょう意いを發おこさん。

自ら法ほふに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゅじょうとともに、
深きく經藏きやうざうに入りて、智慧ちえ海かいのごとくならん。

自ら僧そうに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゅじょうとともに、
大衆だいしゅうを統理とうりして、一切いさい無碍むげならん。

無上むじょう甚深微妙じんじんみみょうの法ほふは、百千万劫ひやくせんまんごうにも遭遇あいあうこと難かたし。我われいま見聞けんもんし
受持じゆじすることを得たり。願ねがわくは如來にがひの眞實義しんじつぎを解げしたてまつらん。

生きるとは……

阿弥陀さまからの提案

沖野 頼信

こんにちは、ようお参りです。最初に三帰依文さんきえもんを読みましょうか。

三帰依文 唱和

偶然生まれてきたのです

「人身にんじん受け難がたし、今すでに受く」と書いてありますね、これ、人間に生まれてくることはとても難しいことですよ、と言ってるわけです。「仏法聞き難がたし、今すでに聞く」と言っているのは、仏法を聞くこともとても難しいことですよ、と言ってるのです。

なぜかという、人間に生まれてきたのも仏法を聞くのもみな偶然ぐうぜんだからです。だから難しいのです。偶然です。この世は偶然と偶然が重なって、いろいろなことが起こるわけです。これを仏教の言葉では「縁起えんぎ」って言うのですよ。

縁によって起きる。誰かがやっているのではないということですね。神様でもなければ、仏様でもなく、偶然と偶然が重なってあらゆることが起きるということを縁起えんぎというのです。

縁というのは関係という意味です。ですから、色々の関係が重なって、私たちは偶然生まれてきているのです。たとえば卵子がありまして、そこへ精子が何万と群がるのです。数多くの中から一個の精子がピュッと卵子に入っただのが皆さんです。その時、もし、違う精子がピュッと入っていたら兄弟が生まれていたのです。皆さんはその時、生まれることができなかった。次

のチャンスはいつですか？と聞かれても、いつか分からないわけです。

偶然と偶然ですからね。私たちは偶然生まれてきたのです。誰かの力ではないということです。この世にある全てのものは縁によって、関係によって起きる。これを別の言い方では「因縁果」と言います。

「因」と「縁」。それから「果」。原因があって結果がある。その途中に関係が入っているわけです。原因と原因がいったい重なることを「縁」といいます。そして結果が出てくる。誰かが「こうしてやろう」とやっているのとは違うのです。

これが仏教の考え方なのです。

自由に生きる

今日のテーマは「生きるとは」ということですが、三帰依文の最初には「私たちは偶然生まれてきたのですよ」と、こう言っているわけです。

ですから私たちは、何の使命も持っていないのです。何かするためにこの世に生まれてきたのと違うのです。これは仏教だけの考え方みたいですね。

たとえば、ミッションスクールって知っていますか。ミッションというのは使命という意味で

す。人は神様によって生まれさせていただいたから何か理由があるはずだということです。この理由が使命だというわけです。

でも仏教的な考え方からいうと、私たちはみんな何の理由もなしに生まれてきているのですよ。だから何の使命も持っていないのです。これを自由ということです。したいことしたらよろしいということです。

だから、「私は何のために生まれてきたのか?」と自分探しをして、それで悩んで悩んで、他人に聞いても分からないと苦しんでいる人がいますが、それは分からないはずですよ。何のために、その「何のために」が初めから無いわけですからね。

煩悩^{ぼんのう}を遊び道具にするんです

使命を持って生まれてきた人のことを使徒^{しと}と言います。皆さんエヴァンゲリオンというアニメを見たことがありますか。その中に悪役で使徒が出てくるのです。使命をもった人が悪役になっているわけです。使徒は、自分ではやりたくないのに、いろいろと悪い事をしなければならぬのです。そういう使命をもって生まれてきたわけですから。

ところが私たちは何の使命も持っていない。どう生きて行ったらいいかというと、好きなよう

に生きていったらいいのです。

だから「正信偈」に、「遊煩惱林現神通」って書いてあるでしょう。煩惱の林に遊んで神通を現するって、楽しむということです。煩惱の林ですから、煩惱を無くすのではなくそのままにしておく。煩惱をそのままにしておいて煩惱を遊び道具にするということです。どう言ったらいいですかね、「私は煩惱だらけのどうしようもない奴です。もうアホですわ」って、煩惱を遊び道具にするのです。これが大事です。

私たちは、煩惱をなくすために修行とかを思い描きますが、実はこれ、何のために生まれてきたかを誤解しているわけです。確かに、煩惱を無くしたかったら無くした方がいいのです。でも、そのままだ良かったらそのままでもよろしい。それぞれの人の自由ですね。本来はそういう生き方です。

苦しいことが好き？

ところが、皆さんそれが気に入らないのでしょう。何か使命が欲しい。生まれてきた以上は「これをしないといけない、あれをしないといけない」というふうに思ってしまふのですね。

これが自分を苦しめているのかも知れません。つまり苦しいことが好きで、使命があると思う

と、いつもじっとしてられないのです。何かしないのだめなのです。

ところが、それをしなくてもいいと言われるから「どうしたら良いだろうか」と戸惑ってしまふわけです。私たちは自由と言われるのが一番困るのです。「あんたはこれをするために生まれてきたのだ」と言われたら、大喜びしませんか。それが、どんな悪いことであってもね。さっきのエヴァンゲリオンの使徒のような使命であっても、あったら大喜びするわけです。

自分のいない岸をお浄土と言います

さて、三帰依文に戻ります。「この身今生みこんじょうにおいて度どせずんば」の「度ど」という言葉には、さんずいへんをつけてほしいのです。渡わたるといふことです。どこへ渡るかというと彼岸ひがんへ渡るといふことです。

「この身今生において度せずんば」とは、今、生きているうちに彼岸に渡らなかつたならいつ渡るんだということです。ですから「さらにいずれの生しょうにおいてかこの身を度せん」と続きます。

「彼岸へ渡る」のが実は仏教の目的です。皆さんは彼岸へ渡ったことありますか。彼岸といったら季節の名前だと思っていませんか。向こう岸という意味ですよ。それだけのことです。日本人はそれを季節の名前に使ってしまったっているわけです。彼岸の中日とか、彼岸が明あけたとか、

彼岸の入りとかいうような言い方をしてしまうわけです。

彼岸というのは向こう側の岸。向こう側の岸とは自分のいない岸ということです。こちら側の岸とは自分がいる岸です。こちら側は此の岸こきしと書いて此岸しがんと読むのですね。この岸は自分のいる岸です。

自分のいる岸を地獄というのはです。そして彼岸をお浄土といいます。自分のいない岸をお浄土というのです。だから、向こうへ渡りましょうというのが仏教の主張です。仏教は私たちをどうしたら向こう側へ渡せられるかということを、一生懸命考えてくれているわけです。もしそれが嫌なら渡らなければいいのです。

地獄を持って歩かない

ところで、私たちは地獄が大好きです。腹が立つような精神状態を地獄というのはです。場所の名前と違うのですよ。ですから地獄は携帯できるのです。

今日私、ほら、電話持ってます。これ携帯電話っていいですね。どこへでも持っていきます。実は、皆さん電話だけじゃなくて携帯地獄も持っているのですよ。だからそれを持ったままで向こうへ渡ったらだめです。地獄を持ったままで向こうへ渡ったら、向こう側が地獄になるの

です。それでは向こう岸へ渡っても何もならない。ちっとも変わらない。

それで、向こう岸でやっぱり腹が立つと思ってこっちに帰ってきたら、またこっちが地獄になるのです。自分が地獄を持って歩いていくからいけないんです。地獄を持って歩かずに地獄を手放すのです。そうすれば、何も向こうへ渡らなくてもこちらがお浄土になるわけです。

地獄からの脱出

地獄に堕ちるというのはどういうことかという、善人と悪人がいると思っている精神状態のことです。皆さんは善人と悪人がこの世にいますか。それとも、この世には善人も悪人もいないと思いますか、どちらですか。

実は、善人とか悪人とかいうのは、それぞれの頭の中に住んでいるのです。外の世界には善人も悪人もいないのですね。これを仏教の言葉で言う、^{「諸法無我」}（しよほうむが）というのですよ。

諸法の諸はこれ「もの」と読むのです。全てのものは無我である。無我というのは客観的にこの世を見る状態を無我というのです。そして、主観的にこの世を見る状態を我^がというのです。我^が見^{けん}といって、我の見解ですね。ですから善人とか悪人とかいうのは、我の見解、つまり私にとって都合のいい人を善人と言い、私にとって都合の悪い人を悪人と言います。そうすると都

合がいいですからね。

都合というのは人によって違うのです。ですから私にとってあの人は善人やと思って、隣のおばちゃんにとっては悪人に見えているかもしれません。善人とか悪人というのはどこにいるのかというと、一人一人の頭の中にいるのです。

外の世界には善人も悪人もいないわけですよ。これを教えてくれるのが仏教です。「諸法無我^が」というのはそういう意味です。良いも悪いもない、良いも悪いもなかったらどうしたらいいかというと、放って置いたらいいのです。

私たちは良い悪いがあると思っているから、悪いやつを懲らしめて、いい人を褒めるように考えるわけです。これを地獄に堕ちているということです。悪いやつなんてこの世にはいないのですよ。あなたにとって都合の悪い人がいるだけの話です。そうすると悪いやつを懲らしめる必要が無くなるのです。その時、ようやく地獄から脱出できるのです。

つまり仏教を聞いたら地獄から脱出できる、地獄はアホみたいなものだということに気がつくのです。

良いも悪いもない世界

主観と客観の区別がつかないということは世の中をちゃんと見ていないということです。ですから世の中を客観的に見ましようよということです。無我という状態を見る。

そうするとこの世の中は空っぽです。無我というのと同じ意味が「空」という言葉、空と書いてこれを空っぽと読むのです。

空っぽですよ。この世の中が空っぽということは良い悪いが存在しないのです。そして空と同じ意味の言葉が「浄」という言葉なのです。これはゼロ。プラスでもないマイナスでもない状態、浄水器というのは純粋の水をつくるわけです。混ざりものがあつたらそれを取り除いて純粋の水にするのを浄水器というわけでしょう。

もともと私たちさえいなかったらこの世は良いも悪いもない世界なのです。私たちは自分の都合で良いか悪いかを決めてしまうわけです。良い悪いが見えてしまうわけです。これを、アホというのです。自分で良いか悪いかを決める。これが実は煩惱の原因です。

ですから、どうですか私たちは良いものを手に入れたい、悪いものを退けたい。いい人を褒めたい、悪いやつをやっつけたい。そんなことばかり考えるわけでしょう。それを使命だと思ひ込んでしまっているのです。

観光客になって見る

偶然生まれてきた人に使命なんかあるはずがないです。放って置いたらいいです。放って置くことを「出家^{しゅっけ}」というのです。

「でっけ」と呼んだらあきませんよ。家を出るといふことは、この世を外から見るといふことです。これはこの世を第三者の目で見るといふことです。そうすると、この世は良いも悪いもない。第三者の目が難しかったら観光客の目で見るといふことです。この世を観光客の見方で見る。

つまり第三者の立場、三人寄れば文殊^{もんじゅ}の知恵と言う言葉もありますが、三人目が大事なのです。一人目と二人目は当事者、三人目が、これがちゃんとこの世を見ている人、つまり第三者ですね。第三者の目で見るとこの世は素晴らしいのです。

ゼロの世界は素晴らしいのです。私たちは良い悪いが見えるから、悪い時代やか、悪い社会やかアホなことばかり言っているのです。良い悪いが見えるから言っているのです。

これは不幸なのです。本来ないものを見ています。幻^{まぼろし}を見ているわけです。だから幻を見ないようにすると楽になります。つまり観光客のものの見方で見るわけですね。

私はシルクロードに五回も行っています。だいたい一回に一週間ぐらい連れていってもらいます。観光客で行くシルクロードはよろしいですよ。五回も行っているのにまだ行きたい。だからテレビでシルクロードの話をされるとまた行きたくなるから、途中で消すのです。でも、もう行かせてもらえませんか。「もう五回も行っているでしょう」と、家内が行かせてくれないのです。ただどあれ、一週間だけ行くから素晴らしいのです。向こうで住むかと言われたらまた別の話です。当事者になったら大変ですよ。だから、観光客というのは良いも悪いもない見方。つまり第三者の目で見ると、損得そんとくで見てないから素晴らしいですね。

阿弥陀さまからの提案

「生きるとは」というテーマをいただいたのですけども、長い長い時間的な視野と、広い広い空間的な視野をもって、この世を見る。これをやってる人のことを阿弥陀仏というのです。

「帰命無量寿如来」きみょうむりょうじゅにょらいこれどつかで聞いた名前でしょ。無量寿如来むりょうじゅにょらいというのは長い長い時間的な視野をもった人。長い目で見られる人ということです。これが観光客なのです。今にこだわらない生き方です。「今でしょ」という人がいますが、あの人はあまりいいものを見てないのですね。だから今頑張らないといけないというふうに言うわけです。「今でしょ」ではなく、

過去・現在・未来という長い長い時間での世を見ていくと、この世は素晴らしいんです。

これが第三者の目で見るということです。なぜなら、過去とか未来には皆さんいないでしょう。今しかないでしょう。だから、過去とか未来の人の目で見るということは想像するしかないわけです。だから、長い長い寿命を持った仏様が、どういうふうに見ておられるかということ想像するのです。この長い長い寿命を持った仏様のことを無量寿如来ということです。

そして、広い広い空間的な視野を持った仏様のことを「不可思議光如来ふかしぎこうにょらい」というのですね。これも聞いたことがあるでしょう。「正信偈しょうしんげ」の冒頭ですね。

実は「帰命無量寿如来」と「南無不可思議光」を合わせると、「南無阿弥陀仏」になります。つまり阿弥陀さまは、自分の名前で私たちに第三者の目で見たらどうですか、と提案してくれているわけです。

放って置きましょう

それを聞いた私たちがそのとおり、第三者の目で見るとどうなるかというのと、放って置くことになります。放って置くことが大事です。放って置くかどうかというと、「それでいいのだ」ということになるのです。この世を自分の思い通りに変化させようと思っっているいろいろやると「そ

れでいいのだ」ということにはなりません。

思い通り変化させようとしても無駄です。皆さんやがては死なないとだめですしね。

「いろは歌」ってありますね。そこには「色いろはにほへど 散ちりりぬるを 我わが世よたれぞ 常つねならむ」とあります。「常つねならむ」とは無常むじょうということですよ。

その次が「有う為いの奥山おくやま」。有為うゐというのは自分にとって都合がよくなるように、いろいろするのを有為うゐというのです。これを欲望ともいいます。欲望を満足させるために一所懸命ががんばることが、有為うゐという考え方ですね。

それについて仏教は無為むゐです。「無為むゐ涅槃ねはん」。涅槃ねはんというのは死んだも同然どうぜんということです。無為むゐ涅槃ねはんというのは、放はなつて置おきなさいということです。放はなつて置おいたら一番いいのです。今日以後、放はなつて置おいたらどうですか。餓死するかもしれません。それも、結構と違いますか。いずれ死なないとだめですからね。

どうして生きたらいいかというのを仏教では、放はなつて置おきなさいと言っているのです。「無為むゐ涅槃ねはん」ニルヴァーナということです。これが仏教の目的です。放はなつて置おくと死んでしまうわけですが、早くに死んだも同然どうぜんになったら、それでも良いのではないですか、ということです。

あなたはとうですか？

これで「生きるとは」の答えになったどうかは私にはわかりません。これは私の考え方、私の仏教の読み方です。

皆さんは私の名前ご存知ですか。私の名前は別に宣伝ではないですが頼信らいしんというのです。これは信頼しんらいの逆です。ですから私の話をあんまり信用しないで、自分で確かめようと思ってください。何度も言いますが、私は私の考え方、私の仏教の読み方でさっきからしゃべっています。皆さんは皆さんで、仏教を自分の読み方で読んでもらうということが大事なのです。

だから同朋どうぼうなのです。私が偉くて皆さんは偉くないという話とは違うのです。「私の言うことをちゃんと聞きなさい。私の言うことを信じなさい」という話ではありません。「私は仏教を、こ、う、い、う、ふ、うに聞きました。あなた方はとうですか」ということです。これを同朋というのです。この同朋会運動を推進するのが推進員の皆さんです。

そういうことで四分ほど超過しましたけども、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

本書は、2015年12月10日に難波別院堺支院（堺南御坊）
で開催された「第2回 第21組 推進員の集い」の沖野頼信
先生のお話を加筆訂正したものです。

この「推進員の集い」を開催するにあたり、下記検討会の
推進員と住職で何度も打ち合わせを行いました。

その結果、毎日の生活の原点を確認したいという推進員の
方々の意向を受け、「生きるとは・・・」という講題で先生か
らお話をいただきました。

先生は、楽しく、そして真摯にご自身の了解をお話され、
最後には「私は仏教をこういうふうに聞きました。あなた方
はどうですか」と私たちへの問いかけでまとめられました。

そこで、この問いかけをより多くの方々と共有することを
願い本書にまとめました。また、先生と相談し「阿弥陀さま
からの提案」という副題もつけさせていただきました。

最後になりましたが、本書の発行を御快諾いただきました
沖野頼信先生に深甚の謝意を申し上げます。

2016年10月1日

推進員の活動に関する検討会

生きるとは・・・阿弥陀さまからの提案

講 述	2016年10月1日 初版発行
発行編集	沖野 頼信
	大阪教区第21組教化委員会
	「推進員の活動に関する検討会」
	事務局 〒593-8312
	堺市西区草部79
	真宗大谷派大阪教区第21組以速寺
組版・デザイン	Tatsumaro Yamao



おきの らいしん
沖野 頼信 師

1935 年生まれ

大阪教区第 7 組本照寺 前住職

第 21 組 第 2 期推進員養成講座講師

総会所教導・真宗本廟教導を歴任

ラジオ東本願寺の時間に出演

難波別院定例法話講師 ほか



真宗大谷派 大阪教区第 21 組教化委員会
推進員の活動に関する検討会